

町家利活用プロジェクトの取り組みについて

1. 基本計画記載されている町家関連事業の効果的な推進(平成20年度にとりくむ事業)

基本計画に記載されている事業について、より効果的な推進方法を検討し、各関連団体が連携をとりながら事業の実施を行う。

(1) 町家じょうほうかん(町家情報拠点)

町家じょうほうかんについては、事業主体である大津市とともに、大津祭曳山連盟、(株)まちづくり大津が本プロジェクトのメンバーであり、じょうほうかんを推進するためにはこの3者が協力して進めていくことが不可欠である。以上のことから本プロジェクトにおいては、他の町家関係者の協力を得ながら以下の事業を実行する。

- ①窓 口: まちづくり会社には、まちづくりに関する様々な情報が集まってくるため、町家を借りたい人や貸したい人の希望を受け付ける窓口は(株)まちづくり大津で行う。効果的な窓口運営の方法などを今後本プロジェクトで検討する。
- ②探 ず: 空き町家に関する情報集めは地域に根づいた組織である大津祭曳山連盟で行う。また、(株)まちづくり大津において空き町家に関する全域調査を行い、平成17年度に町家に関する調査が行われて以降の実態を把握する。情報集めや調査に関する具体的な方法等について、今後本プロジェクトで検討する。
- ③P R イベント: 町家を使った商売の提案や町家活用希望者とのつながり作りのために大津百町市を地域住民や既存の商店とともに開催する。より効果的に行うための具体的な場所や期日、地元の巻き込み方などについて、今後本プロジェクトで検討する。

(2) 旧町名の看板整備事業の具体案検討

案内看板の整備は、基本計画にも記載されている事業であるが、具体的な内容は定まっていない。第2回の活性化協議会でも議論されたとおり、町家の利活用と大津百町の旧町名の尊重は密接な繋がりがあるため、旧町名の看板整備事業として、本プロジェクトにおいてその実現に向けた方策の検討を行う。

本プロジェクトでは、以上の2つの事業以外についても、今後順次基本計画掲載事業のうち町家に関連する事業を検討する。

2. 町家利活用を促進するための地域を巻き込んだ事業の検討

基本計画に記載されている町家関連事業についても、実施に向けた検討を行う。

(例) 登録文化財を活かしたまちづくり

ほめる事業(まちのよいものを見つけてほめる)

まちづくりに一体感を与える事業の実施に向けた検討を行う

統一ロゴ付のぼり製作事業

第1回 町家再生利活用プロジェクト会議 議事録

日時：平成20年6月6日（金） 午後5時から午後7時30分

場所：社会教育会館 1階 会議室

参加者：委員 白井、柴山、青山、脇田、平井、高栖
オブザーバー 加藤、浦野
事務局 山下、小西、高野、高木

(50音順・敬称略)

1. あいさつ（白井委員長）

2. 自己紹介

3. 本プロジェクトに関する概要説明（事務局）

4. 議題

(1) 情報交換

各委員により、配布された資料に沿って各委員が所属する団体の活動紹介。

- ・ 大津祭曳山連盟（白井委員長）
- ・ 大津百町の町家再生研究会（柴山委員）
- ・ 大津の町家を考える会（青山委員）
- ・ 大津エンパワねっと（脇田委員）
- ・ 町家を活用した店舗経営の事例（平井委員）

(2) 意見交換まとめ

- ・ 昨年大津祭と同時に試験的に実施した大津百町市を、中心市街地の活性化に結びつく一つの方法として開催し、そのためには天孫神社、中京町、上京町をラインと考え、定期的で開催する必要があるという意見が出された。
- ・ 基本計画に掲載されている案内標識整備事業にもあるように、大津百町旧町名を復活させるために、まずは大津の景観に合うように旧町名の看板を設置したいという意見が出された。
- ・ 各委員によって中心市街地活性化基本計画に関する情報量が異なるので、今後さらに情報共有に取り組み、基本計画における本プロジェクトの位置づけを明確にする必要があるという意見が出された。
- ・ 各委員は町家について何らかの活動に携わっている方なので、本プロジェクトで出された課題、方策などを基本計画に反映できればという意見が出された。
- ・ 町家の再生・利活用は、ただ物理的に町家を保存するというものではなく、住んでいる人がいまちだと思え、よそから見て住んでみたいと思えるまちになるようなしくみと、町家の利活用をセットで考えていく必要があるという意見が出された。
- ・ 「祭りちょうちんの似合うまちなみ」というのは、大津のまちなみを今後考えていく上で、非常に有効だと思う。町家だけでなく、マンションでも祭りちょうちんが似合うというコンセプトのもとにまちなみを整備すれば、人の生活が感じられるまちなみを形成することができるのではないかという意見が出された。

5. 閉会

第2回 町家再生利活用プロジェクト会議 議事録

日時：平成20年6月25日（金） 午後2時から午後4時30分

場所：社会教育会館 1階 会議室

参加者：委員 白井、柴山、青山、脇田、平井、高栖
オブザーバー 加藤、浦野
事務局 高野、高木

(50音順・敬称略)

1. あいさつ（白井委員長）

2. 配布資料説明（事務局）

3. 意見交換まとめ

〈町家じょうほうかん〉

- ・町家じょうほうかんは空町家情報を提供するとともに、貸し借りをを行う場合に、借りたい人と貸したい人が互いによく知ってもらうというプロセスを大切にしたシステムだ。
- ・店舗を導入する場合には、まわりの人にとっても安心できるプロセスや業種の選定が必要だ。
- ・出店する際には、町家の勉強会や家主との話し合い等さまざまなプロセスを経る必要があり、他都市での事例ではこちらの趣旨が理解できない人は途中で辞退するケースが多く、良い店舗を導入することができるというメリットがある。
- ・新しく入ってくる人を地元のひとが快く迎えることができる仕組みがあったらいいと思う。成功事例ができてくるということが大事で、暮らしに慣れていくためにフォローアップしていく仕組みが必要である。
- ・じょうほうかんは市の事業だが、活用可能な建物の情報収集は市では難しいので曳山連盟という地域に根づいた組織にお願いしている。去年は、まず紹介できる物件を把握するべきだと考え、物件さがしに力をいれ、大きく広報はしていない。新聞などに報道されたのを見て問い合わせのあったものは十数件ある。備まちづくり大津には、今後いろいろな情報が集まってくるはずなので、じょうほうかんの窓口を担当してもらいたいと考えている。
- ・じょうほうかんについては、地域のひとりひとりに情報が行き渡るよう、瓦版のようなものを定期的に発行することを考えている。
- ・今年度は、再度地域全体の町家の現状調査とともに、窓口、情報収集、紹介、イベントに取り組む。
- ・大津市では、町家じょうほうかんも修景助成制度も、地域住民の気運の高まりや気持ちを大切に、支援したいと考えている。そのため、助成制度も伝統的建造物だけでなく、新築でもまちなみに調和するよう建てる場合には助成する。じょうほうかんでも町家について厳密に定義することによる必要以上の線引きはしない予定だ。

〈大津百町市〉

- ・去年は大津祭当日に実施したが、時期についてはもう一度考え直したい。場所については天孫神社と調整できているので是非活用したい。
- ・地域の店舗にも声をかけ、みんなを巻き込むことが必要だ。みんなで盛り上がっていくことこそまちづくりにつながる。

- ・大津祭の日に実施するのはあまり得策ではない。しかし、百町市単体で人を呼ぶのは難しいし、人が来ないと続かないので、既存のイベントと抱き合わせて行う必要がある。
- ・10月18日に予定しているまちなかの商店街をめぐる大津まちなか食ウォークにあわせてやるという方法もある。この日にはスポレクがあり、ふれあい行事もするので多くの人が集まる。

〈旧町名の看板整備〉

- ・中心市街地は、大津百町とはいうものの、それを示す統一されたサインがない。前回の会議で検討したことを踏まえ、まず旧町名の看板を復活させてはどうか。
- ・お金はかなりかかるように思われるが、どんなものを何枚つけるのか検討しなければならない。
- ・基本計画掲載事業なので市で予算化したいと考えている。実施は早くても来年度になる。
- ・位置やデザインを決めていくプロセスを大事にし、地域住民を巻き込んでいくことが必要だ。
- ・できればスポンサーをとって広告料で作れないか。
- ・地元と一緒に楽しんで取り組むことが大切だと思う。まちなみに調和するようにデザインなどはある程度統一しておく必要があるだろう。
- ・来年度市の予算を活用する場合今すぐに検討を着手し、9月の予算要求までに事業内容を調整する必要がある。スポンサーを集める方法や情報収集に取り組むことも同時で行う。
- ・単なる看板整備ではなく、地元の人を巻き込みながら取り組み、具体的なことについては、今回出たアイデアを参考にしながら詳細に詰めていく。

〈登録文化財を活かしたまちづくり〉

- ・登録文化財を活かしたまちづくりについては、大津の中心市街地では登録に値するものがたくさんある。問題は、それをきちんと評価してコメントを書いて申請することだ。もちろん、所有者の理解や了解も必要である。
- ・文化財保護課によると、コメントを書くのは1級建築士もしくは学識経験者であれば可能であり、図面も比較的シンプルなものでよいのでそれほど問題はないだろうとのことであった。しかし、事前にどれくらい登録するのかしっかり計画をたて、県や国に事前に相談しておく必要がある。

〈ほめる事業・まちづくりに一体感を与える事業〉

- ・(株)まちづくり大津のロゴやマークを作って、看板などに入れてはどうか。みんなでこの会社を盛り上げていかないといけない。商売だけに限らず、ボランティアも含めいろいろなまちづくりの活動を(株)まちづくり大津の名前で、表彰をするなど、ほめるという事業をしてはどうか。
- ・みんなで大津のまちづくりの事業に参加しているんだという一体感が出るような取り組みがよい。
- ・違う団体が同じ日にまちなかでイベント等を行う場合などに、同じ目印やのぼりを立ててやったほうが、同じ目的に向かってやっているということが、内外ともに分かりやすい。
- ・統一した旗やのぼりを予め作っておき、何かあるごとに貸し出したりするのもいいと思う。このイベントは、みんなで行っているまちづくり活動であるという意識づくりになる。
- ・いろいろな団体がせっかく思いを持っていろいろやっているのに、その時だけ、その場だけで終わってしまうのはもったいない。各種活動が分かりやすく表示されている媒体を作ってはどうか。例えば大津のまちづくりウィークリーのようなタイトルでまとめてみてはどうか。

4. 閉会

大津市中心市街地活性化協議会町家利活用プロジェクト会議名簿

氏名	所属団体	備考
白井 勝好	NPO法人 大津祭曳山連盟 理事長	◎プロジェクトリーダー 中心市街地活性化協議会委員
柴山 直子	大津百町の町家再生研究会	中心市街地活性化協議会委員
青山 菖子	大津の町家を考える会 会長	中心市街地活性化協議会委員
脇田 健一	龍谷大学社会学部 教授	龍龍使用者
平井 洋子		町家を活用した店舗経営者
高栖 清		タウンマネージャー

事務局	まちづくり大津	小西 元昭
	大津市都市再生課	課長 堀出 正治
		主査 高野 早人
		主任 高木 裕司
オブザーバー	コム計画研究所	加藤 寛之
	コム計画研究所	浦野 義人